

教会の宣教のヴィジョンと責任

使徒パウロは1:1~7で挨拶の言葉を綴った後、8節からいよいよ本論に入るが、8～17節は、15章まで続く福音についての長い教え（本論）の序論的な部分である。そこには（1）まだ会ったことのないローマの信徒たちに対する使徒パウロの熱情溢れるメッセージと（2）福音宣教に対する使徒パウロの燃えるような情熱とが、実に印象的に感銘深く描かれている。

この箇所から3つのことを教えられる。すなわち、第1に、教会の宣教のヴィジョンについて、第2に、教会の宣教の使命（責任）について、そして第3に、教会の宣教の内容としての十字架の福音についてである。

第1にパウロから学ぶことは、その宣教のヴィジョンの壮大さである。

ヴィジョンとは何か。それは夢や幻と訳されるが、福音の前進と人々の救い、神の国とその栄光のために、神のみ言葉と御霊に感動されて、世界を見つめ、未来を見つめて生きるキリスト者の夢であり幻であり、願望であり祈りである。そのようなヴィジョンは教会の生命であり、そのような宣教のヴィジョンが欠ける時、教会の勢いは衰え、その霊的生命は沈滞していく。

歴史のフィルムを巻き直して見る時、十二使徒を中心とする初代教会のクリスチャンたち（その多くはパレスチナから一步も外に出たことのない人たちであった）、或いは使徒パウロが、何と壮大なヴィジョンと燃えるような情熱をもって、神の国の福音とその前進のために、世界を見、失われゆく魂のために生命をかけて働いたかが分かる。

身はアジアの片隅に置きながら、すでに彼らは世界を見ていた。地の果てを見ていた。この壮大なヴィジョンが、福音を世界へと拡大させるダイナミックな力となった。教会に必要なのは、このような宣教へのヴィジョンである！ 私たちは小さい群れでありながら、このワシントンにおいて世界大の福音宣教の業に参加しているという意識をしっかりと持つことは大変大切なことである。

第2に学ぶことは、教会の宣教の使命（責任）である。

使徒パウロは言う「私はギリシャ人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも果すべき責任があります。それで、ローマにいるあなた方にも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです」。ここで「果すべき責任がある」とは直訳をすれば「わたしは負債者である」という言葉である。自分に与えられた福音宣教の使命を、彼は「負債」と呼んでいる。負債は、当然支払うべきもので、支払ったからといって手柄になる訳ではない。当然の義務である。

それと同様に、キリストの福音に生かされているキリスト者は、この世にキリストの福音を伝える聖なる義務が与えられている。神の恵みを人々に伝える義務と責任を負っている。パウロは別の箇所で「わたしが福音を宣べ伝えても、それは誇りにはならない。なぜなら、わたしはそうせずにはおれないからである。もし、福音を宣べ伝ええないなら、わたしは災いである」とまで言っている（第1コリント9:16/口語訳）。

宣教は教会の使命でありキリスト者に与えられた義務である。自分の事だけに目をとめるのではなく、他の人々のためにも、世界のために目を向けていく。教会はこうして、宣教に参加することによって、成長していく。